

山村のあるべき姿

誌名	岐阜大学農学部研究報告 = Research bulletin of the Faculty College of Agriculture Gifu University
ISSN	00724513
著者	林, 進
巻/号	49号
掲載ページ	p. 97-107
発行年月	1984年12月

山村のあるべき姿——ひとつの思考実験^{ゲダンケン・エクスペリメント}

林 進

森林経営学研究室
(1984年7月31日受理)

An Ideal Type of Mountain Village

Susumu HAYASHI

Laboratory of Forest Management

(Received July 31, 1984)

SUMMARY

Principles for creating an ideal type of mountain village are as follows ;

1. Establishment of the principle of self-reliance and self-respect.

This principle is composed of the following factors.

- ① Formation of the original culture of mountain village.
 - ② Pursuit of the abundance through better use of natural resources.
 - ③ Conservation of the ecosystem, water and soil of individual areas.
 - ④ Pursuit of the individuality of production by individual producers.
 - ⑤ Use of natural resources of stock and circulative type.
2. Establishment of "vernacular" technology.
- ① Revival of the artisan technology.
 - ② Establishment of the technology to bring prosperity and amenities to residents of mountain villages.
 - ③ Formation of human relations and communal spirit.
 - ④ Identification of life style in the productive activity.
 - ⑤ Construction of the native place of the technology to realize the commensality of human and nature.
3. Promotion of various economic and social organizations in mountain villages.
- ① To get rid of narrow mindedness.
 - ② Pursuit of pluralistic theories of value about culture, economy and society.
 - ③ Overall of agriculture, forestry, stock-raising and industry.

Res. Bull. Fac. Agr. Gifu Univ. (49) : 97-107, 1984.

要 約

山村の「あるべき姿」の原則は、以下のとおりであるべきだと筆者は考える。

1. 「自立・自尊」原則の確立

この原則の構成要素は、次のとおりである。

- ①独自の生産文化の形成
- ②自然利用率向上による「豊かさ」の追求

- ㊦個性的な生態域——水土保全の徹底
- ㊦個性的な生産者による「生産の個性」の追求
- ㊦ストック型、循環の資源活用

2. 地域固有技術（ヴァナキュラー・テクノロジー）の確立

- ㊦職人技術の再生とその市場拠点の形成
- ㊦地域住民の暮らし、それ自身を豊かにする技術
- ㊦技術に基づく人間連帯と「共同の喜び」の形成
- ㊦生産と生活の一体化
- ㊦自然と共生した技術のふる里づくり

3. 組織活動の推進

- ㊦地域内住民の「人の和」を基盤にし、地域外との連帯「人の輪」づくり
- ㊦閉鎖性よりの脱却
- ㊦同等性を持った多種多様な人間同志の連帯
- ㊦価値の多元化と生産の複合化

結 言

現今の山村の実態を眼にすれば、「あるべき姿」などと悠長なことを言っておれるか、という非難を浴びることを承知の上で、筆者は、それでもなお止みがたい衝動に駆られつつ、ひとつの思考実験の結果としての本稿を世に問う。具体的には、和歌山県の奥地山村を回りつつ抱いた「想念」が、本稿に込められている。それは、さらに筆者の山村行脚のハイマートたる岐阜県内のいくつかの、恐らくは筆者の拙い研究史に大きな画期をもたらし、心情においては終生忘れ得ぬ印象を植えつけた村々において、筆者が自らの内部に積み重ねて来たものの中を濾過することによってのみ、ひとつの「想念」にまで昇華させ得た。その意味で本稿は、筆者のこれまでの山村行脚の「標」となるものである。

I 3つの柱の設定

山村の「あるべき姿」を構想するに当たり、筆者は、先ず「3つの柱」を設定しておきたい。この3つの柱は、筆者の構想する山村像の構成軸であり、山村があるべき姿を取り戻すための里程標ともなるべきものである。

ただし後述するごとく、3つの柱の設定を画一的に山村を認識するための規準として理解してはならない。筆者は、山村が村毎、地方毎に「多様な個性」として展開して行くべきだと考えている。従って3つの柱は、その「多様な個性」を実現して行く上で踏まえるべき、いわば「共有の原則」なのである。換言すれば「山村是の共有」と言い得ようか。

1. 第1の柱：「山村の自立・自尊心」

山村は、生活圏であると同時に生産圏でもある。言ってみれば至極当然のことのように思えるが、現状において山村、特に奥地山村は、生産圏としての地位を急速に低下しつつある。いわゆる定住化政策が実行されざるを得ない所に、その事態進行の深刻さが端的に示されている。

何故なら、生産圏としての地位と機能とを喪失して行く山村は、生産圏として存立するための要件である自己維持機能を、実体として持ち得なくなってしまうからである。そこで“まず定住”という、それ自身直接的ではあるが、その実能動性・自律性を持たない政策実行によって生活圏としての最低限の水準維持を図り、それを基盤に生産圏の再生を期待する方向設定が行なわれる。

しかしこの政策プロセスは、実は逆転した社会政策であると言わねばならない。まさしく生活は生産と結びついてこそ根拠を持ち得るのであり、従って生産の自立なしに生活の自立はないと言えるのである。

物の順序立てに従えば、生産こそが優先要件なのであり、生活はそれに併進して現われるものとなる。

さて生産の自立化と言った場合、山村においてはそれはどのような原則を踏まえて追求されるべきであろうか。次に考察を進めよう。

かつて山村は、独自の生産文化を有していた。生産の継続が生活を形作り、それが即文化となっていた。その文化は、自然の恵みを利用し尽すことによってもたらされた「豊かさ」に支えられていた。それが故にこの「豊かさ」は、どんな場合でも画一化から自由であり得た。四季折々、地方それぞれ……と表現される風景は、その実態の表現であった。

明治以降、日本社会の“近代化”に同調して（あるいはさせられて）山村も又“近代化”への歩みをはじめが、それは結局山村独自の「豊かさ」を徐々に喪失して行く過程となった。第2次大戦直後、一時山村への評価の高まりが見られたかに思えたが、それも敗戦に伴う都市・工業の壊滅状況に比しての相対的な浮上に過ぎず、本質的な「山村復権」ではあり得なかった。

このことは、戦後復興期に続く高度経済成長期に入って如実に示されるに至る。この期に進行した山村の全面的な再編・解体の事実、明治以来わが国経済社会がたどってきた山村軽視（むしろ蔑視に近いものであったろう）の上に立つ“近代化”の総決算とでも言うべき内容を伴っていた。そしてその結果、山村の独自の「豊かさ」は、急速にかつ広汎に否定されて行き、替って画一的な都市的な「豊かさ」こそが至上の価値を持つものとして、山村に移入されて行ったのである。

都市的な“豊かさ”——それは、端的には大工業製品こそが生産・生活の豊かさをもたらすという考え方の中に凝縮されて、その実体が示される。山村にそれを移入してはならないとまで言うつもりはないが、問題は、その移入が山村独自の「豊かさ」や個性を否定し、駆逐して行ったことに求められる。いわば「都市の合理」が「山村の合理」を押し、その結果山村の都市化・画一化が進行して行ったのである。われわれは、この結果を、単に“力の強弱”、“必然の流れ”などとわけ知り顔に認めてしまうべきではない。

山村社会は、生産を踏まえてこそ成り立ち得る。しかし上述の経過の中で、山村社会は、生産文化を後退させられ、替って消費文化がそこに代位して行った。語の本来の意味であるカルチャー（文化であると同時に耕作の意味を持つ）の否定がなされ、大量の労働力が都市・大工業へと吸引せられ、その労働力によって生産された消費物資・消耗品が、山村に流入し、さらにその生産基盤を弱体化する作用を及ぼして行った。誠に痛烈な“経済の皮肉”とでも言うべき事実であった。

消費・消耗品文化に浸された山村は、生産文化の伝統を次第に薄弱化させられ、都市を規準にした画一的な価値体系の中に組み入れられるに至った。消費文化及び所得額の指標に基づいた社会・地域の序列化の中で、当然にも山村は、常に劣位にランクされ、その結果遂に都市の山村に対する優越という「信条体系」とも言うべき価値観が、社会的に許容されるまでとなった。

「貧しさ」とは何なのか？「豊かさ」とは何であるべきか？多くの疑問を残しつつも、大きな流れに押し流されて来た山村は、しかし現在その自立性を、ほとんど喪失していると言ってよい状態にある。そして同時に、独自の個性と伝統に支えられるべき社会としての「自尊」をも、失いつつあると言っても過言ではない。

人が^{きようじ}矜持を失った時人生に支えがなくなるように、ある社会が「自立と自尊」を奪われたなら、その社会は限りない墮落の淵に迷い込む。人の矜持と同様、社会の「自立と自尊」は、まさに「生命の如き尊厳」として常に確認されなければならない。

山村社会の「自立と自尊」は、農林業生産文化にその源がおかれている。前述した様にカルチャー（文化）は、本来農林業生産そのものを示す言葉なのである。それでは農林業生産の本然の姿とはどのようなものであり、あるべき山村社会においてそれをどの様に位置づけるべきか。更に論を進めよう。

山村は、本来それ自体が「個性的な生態域」である。傾斜面に拓かれた小規模分散的な耕地——それは、一筆一筆ごとに土地の性質を異にしている。その相違は、ただ自然条件の違いのみによって生ぜしめられているのではない。その様な自然の多様性に対応し、土地を育て守ってきた山村民個人個人の営為によってこそ、土地の性質の違いが生じているのである。まさに「個性のある土地」と言えようか。

その様に形成されてきた「個性のある土地」を舞台に、住民個人個人の「個性的な生産活動」が展開される時、山村は自ずと「個性的な生態域」たる実質を具えるのである。

ところで「個性的な生態域」は、もちろん一つの「自己維持システム（＝自律系）」として考えられるべき生産・生活圏である。そうであるとするならばここであらわれる社会は、「循環型資源」の活用を基軸に

して構成されるものとなるべきであろう。「自己解体システム」とも言える「消費型資源」活用に依存した社会とは、全く異質の社会がそこには見えている。都市に対置する山村、否都市に勝る山村が、むしろ人類社会の存立を照射する形で、あるべき社会の姿をはっきりと描くことができるのである。

山村は、これまで都市化の道を進むことによって自らの足元を掘り崩し、終に自立を危うくするに至る道を進んできた。その要因分析は多岐に亘ってなされねばなるまいが、最も端的にその様相を示すとすれば、それは山村が「消費型資源」に依存することによって、自らの安定と自立の根拠を薄弱化した事に求められよう。

山村は、「消費型資源」依存への道を進むことによって、都市との距離を縮め同化しようとしたが、結果として現われたのは、山村の都市への従属という事実であった。それは、社会的序列（差別）化にとどまらず、産業面においても農林業及び小工業等の山村自立の源たる生産活動の衰退をももたらしたのである。そして山村民は、“村存立への不安・危機”におびえるに至った。

以上の文脈に立って、山村社会の再生、未来における自立の根拠を設定するなら、それは「消費型資源」依存から脱却し、「循環型資源」活用を基軸にした社会の再構成を図ることを措いて他にない。そして「循環型資源」活用の核となるのは、山村最大の資源たる土地である。個性に満ちた土地利用形態の創造とその利用率の向上こそが、山村の未来に構造的安定性と経済的自立性を保証する。

現在までの社会は、生物になぞられて言えば、「成長社会」と言えよう。そうであれば次の段階は、「成熟社会」となる。成長が画一化、序列化によって推進され、その結果への評価がなされるのに対し、成熟は、個性化、並列化によってこそその内実形成がなされ、又その様に評価されるもする。山村の役割は、個性化、並列化を都市の様に風俗化するのではなく、土地利用という実体基盤を根幹に据えた農林業生産文化を創造して行く事に求められる。かかる生産文化の形成は、社会全体における人間性の回復を、山村が先鋭的に拓いて行く道筋を示すものとなる。

個性に満ちた土地——営々と築かれてきた伝統の産物。山村は、未だそれを完全に失ってはいない。山村は、「循環型資源」活用社会の形成を図る上で、最も豊かな条件に恵まれていると自覚すべきではないか。

与えられた条件の豊かさを活用し切れぬ。それが“無知”故の結果なら、山村をそこに留めてきた要因を除去しよう。しかしそれが“不満足”故にもたらされた結果であるとするなら、われわれは、その様な“心の貧しさ”を敵として排除せねばならぬ。

山村の今が悪いのは、今の条件が悪いからのみではない。自らに与えられた条件の豊かさに満足せず、従ってそれを満度に活かそうとしない心の貧しさにも、事の一端がある。まさしく自尊なくして自立はない。

土地が小規模でしかない。これを人は、山村の弱点だという。しかし小規模だからこそ集約利用が成り立ち、利用率の向上も図られるのである。

土地が斜面にある。これも人は、山村の弱点だという。しかし斜面にあるからこそ多様な自然条件に対応した形で、個性に満ちた土地利用が成り立ち、画一的な栽培の弊から免れ得るのである。

自らに与えられた条件に満足すること。これは、決して封建的忍従を山村に迫ることではない。むしろ逆に、自らにのみ与えられ、他には与えられていない条件を“強み”としてそこに拠り、小回りをきかせた土地利用型生産活動を展開して行くことこそが、都市・大工業に屈服せず、わが国経済社会の中で山村が独自の地位を占め続け得る王道なのである。

2. 第2の柱：「職人技術の市場拠点化」

山村には、長い伝統に支えられて保存、伝習されている職人技術（技能）が数多くある。しかしそれらは、既に実際の生活とは無縁になってしまった技術も含みつつ、細々と残っているに過ぎないといえよう。

山村の職人技術を圧倒したのは、都市を中心に発達した消耗品文化に支えられる大工業技術である。大工業製品に比べてはるかに精緻で、しかも人間味に富む製品の数々を生産する職人技術は、その実質価値への評価すらなされることなく、技術発展段階の劣位にあるものとして不当に軽視され、終には無視されるに至った。

作った職人の“手のぬくもり”の伝わる製品に替って、機械と油の冷たさに覆われた製品が、われわれ

の生活空間の主演の地位を占めるようになった。その中でわが国の職人達は、逼塞せしめられ、その技術は、ほとんど壊滅状態に陥ったと言ってよい。

この様な現状において、偶々職人達の作り出した製品が“手づくり”ともてはやされ、一見評価されているかの如き場合があるのは事実である。しかしそれも現在の消耗品文化に対置し、職人技術の正当な地位を、大工業技術と少なくとも同等性をもって確立して行く方向を持たない限り、道楽ないし好事家の愛玩の域を脱し得ないものとなる。それこそ職人技術への評価どころか、その最終的な衰亡を決定づけることとなる。

山村における生産活動は、それが土地利用型生産であれ、家内工業ないしは手工業的な小工業であれ、すべて個性的ならざるを得ない。画一的、統一的な技術などは、元々山村内においては発生、定着する素地はない。小規模、分散的であるということは、それらがそれぞれ個性的であることの別表現なのである。

個性的な生産活動は、その内部契機としてそれに携わる者の「作る事を楽しむ心」が含まれている。個性即ち人間味と等置し得る根拠がここにある。この様な本質に支えられるからこそ山村における生産活動は、一つの「生産文化」たり得たのである。それが職人技術だったのである。

山村において職人技術の復権を図ることは、しかし過去への単純な回帰を示すものではない。このことは、重々確認しておかねばなるまい。

戦後日本の経済成長は、価値観の一元化、技術の画一化（平準化はその具体的あらわれ）を伴うことによって、社会の隅々にまでその影響力を及ぼした。その成果は、確かに大きくわが国経済社会の構造を、根本から変革せしめるに至った程である。

しかし反面、社会に歪みが生じ、人間性回復の必要性が論じられるまでになった。成長社会から成熟社会への移行が提起されたのも、そのためであった。

成長社会から成熟社会への移行——その諸相は、多くの内容によって示せよう。しかし山村の未来を展望するに当たって一点を示すとすれば、筆者は、「生産即文化」となる社会の建設を挙げよう。これは、都市・消費文化を否定し、農山村・生産文化を再生させる道である。

個性に満ちた職人達が、多様性に富む資源の利用・再生産を図りつつ、小生産者、小工業の復権を目指すこと。小工業を、都市・大工業に少なくとも等置すること。このことによって山村は、一つの生産圏としてわが国経済社会の中に、確固とした地位を築くべきであると筆者は考える。

循環型資源活用に拠り、山村は、職人とその技術の保全・育成・伝習の場となる道を歩むのであるが、それは、単に“山村の産物”を都市に送るためのものではない。もっと広く、もっと先鋭的に筆者は問題設定をしたい。だからこそ標題のごとく、第2の柱を「職人技術の市場拠点化」にしたのである。そのことの意味を、更に追究しよう。

山村は、自らの内に伝統として持ち続けてきた職人技術の復権を通じて、山村文化の再生を図るべきであることは、前述したとおりである。しかしこれは、山村の独自性（特色）を社会全体に対して主張するにとどまらず、いわば生産文化の根幹をも社会に向けて強調する道なのである。個性・人間性の復権、あらゆる地域の同等性確立への主張がそこには込められている。

そうであるとすれば、山村における職人技術の復権は、同様に逼塞状態にある他の地域のその再生をも、同時に図るものとならねばなるまい。職人技術は、都市にあらうと山村にあらうと本質的には同等性を持つものとして評価されねばならない。その認識に立って、都市における職人技術の再生を、山村が主導すべきなのである。

都市にあって細々と生き永らえるに過ぎない職人技術の数々に、はっきりとした「技術のふる里」を与えること。それが山村に与えられるべき役割である。このことは、わが国においては不当にもその本来の意義を理解されないまま、ただ産物のみが輸入されるに過ぎない、発展途上国の職人技術に対しても、正当な評価を将来下して行くための基礎要件となるはずである。

幸い、未来の社会は、多くのメディアの開発により、情報の収集・伝達には事欠かない。大工業の生産物であるそのメディアを活用し、職人技術・小工業の再生を図ることにより山村は、未来社会で都市に挑戦するのである。

山村は、都市をも含めてわが国に伝わり定着させられてきた職人技術のすべてを、否それどころか、ネパール・カトマンドゥの卓越した木工技術、マニラ、バンコクの建築部品製造技術等々東南アジア諸国に生きる職人技術の情報をすべて集積し、伝達し、伝習する機能を持つ「技能都市」(マイスター・ポリス)たるべきである。これは、都市・大工業によって推進されてきた消耗品画一文化に対置して、はるかに個性に満ち、「作る事を楽しむ心」に溢れた生産活動(文化)を、山村において打ち立てる壮大な道となる。

山村の“産業開発センター”において、国内諸地域の職人技術の成果やネパールの木工技術の素晴らしさを、テレビ画面に映し出された映像及びデータを通じ、同時・臨場的に掌握できる夢を描くことは、現在の通信、情報伝達技術の発達に基づけば、十分過ぎる程に確実な未来予測といえよう。

集積された技術の数々は、山村において伝習され、時には更に高度な技術に高められて、山村から生産物・技術者として送り出されて行く。山村は、職人技術の産物の生産拠点であるのみならず、同時にその技術の市場拠点たることによって、技術者の吸引・定住・再生産の場としての機能を発揮する。このことによって山村は、“産物を”の段階から“技術を”消費市場に送り込む段階へと歩を大きく進めることができるのである。

3. 第3の柱：「人の和、人の輪づくりの推進」

山村は、地理的な面積は別にして、社会単位として見た場合、概して小さな社会であるといつてよい。しかも個別の経済力が弱いという現実認識に基づき、“組織づくり”によってそれを克服しようとする試みが従来なされてきた。つまり“小さな社会”である山村を、組織的に一つにまとめあげようという方策が実施されてきたのである。

これは、或る場合には有効性を発揮するが、逆に山村を一層弱体化する危険性をも内包する方策である。何故なら組織化は、しばしば組織の純一性を保持するために、「単一性の組織化」に傾き勝ちだからである。そしてそこに向けての山村の生産活動の統一化が図られ、作目の単純化、生産者層の単相化が推進されることになる。よくある“特産地化運動”、“一品運動”がその弊に陥り易い危険性をはらんでいる。

筆者は、あるべき山村像は、“多様な個性”を原点にして描かれるべきであると考えている。そして組織化とは、その多様な個性がそれぞれ同等性を持つものとして互いに出会う仕組であると考えている。従って組織化とは、別の表現をとれば多様な個性がそれぞれに自立しつつ、共同の力によってムラ作りをする仕組そのものだけといつてよい。これは、単一性の組織化に比べて、はるかに強く、永続性のあるものとなる。

山村は、とかく閉鎖性をもつと考えられてきた。山村内部の閉鎖性が外部に対しての対応の柔軟性を欠如させる因となってきたことは、否定できないことかも知れない。それが何故なのかの分析はさて措くとして、あるべき山村像の原点を“多様な個性の出会い”におくとすれば、いわゆる閉鎖性は解消されて当然のものとなる。

多様な個性の存在は、一元的価値に基づく序列化を受け容れない。そこに現われるのは多元的価値の社会であり、個性は、それぞれ同等性をもつものとなる。人ごとに、ムラごとに、そして地方ごとに生産・生活の内容が違ふ、しかもそれらはすべて同等性をもって並列している。これが山村のあるべき姿である。

多様な個性、多元的価値の存在を認める社会では、人々は、“外”とのふれ合いを積極的に求める。自立と自尊とに裏づけられてこそ他者の存在を受容する寛容が生まれるのである。

山村の人々が外とのふれ合いを求める時、彼等は、そこで自分達と本質的に変ることのない「同等性を持った人間」を発見するであろう。その過程を経てはじめて山村に住む人々は、自分達の生きる意味と山村社会の存在する意義とを自覚するに至る。この時、山村社会の何処に“閉鎖性”が存在し得ようか。

山村社会内に多様な個性と多元的価値とを創造して行くこと。これは、人の「和」を作り出す。その様な山村社会は、必然的に外の社会に対して同等性の評価を下す。それは、それぞれの異なった社会間の自律的な相互関係を形成する基盤となって行く。山村社会の人々は、かくして拡大された視野を自らのものとして行くのである。ここで現われるのが人の「輪」である。

山村内での人の「和」なくして、外へ広がった人の「輪」は、決して存立し得ない。現在よく見られる“ふる里の村”運動が、よくこの原則を踏まえているかどうか深く反省して見る必要があろう。そうでな

ければ山村は、単に都会の人々に迎合するだけの“ふる里”でしかなくなるのではなからうか。

II 具体化への道——4つの基本方向

前述した3つの柱に基づいて、山村のあるべき姿を構想する時、筆者は、現在の時点で次のように4つの基本方向を設定している。以下その内容を述べる。

1. 山村農業の「自給・産直化」

山村における農業生産は、平場農村の様な広いまとまった農地を対象にした、少種目大量集中生産方式で営まれることはない。その反対の多種目小量分散方式で臨まねばならないのである。この方式が、山村の個性的な土地利用を形成することは既述した。又、それが故に山村農業は必然的に複合化し、農地の集約利用がなされることも述べた。

この場合、農地を土地利用種目上の耕地に限定して考える必要はない。山村に広く展開する林地も又、農用地化し得る資源なのである。林地は農用利用を受け容れても、有機物循環系としての生態系を破壊されることはない。わが国の山村では、林地の農地利用を含んだ林業（逆に林業利用を含んだ山地農業と言うべきか）が、十分に成り立ち得る。アグロ・フォレストリー（混農林業）がそれである。

このような形態も含めて多種目複合化の特性を持つ山村農業は、一般的に展開されている平場農業の大量集中生産に対して、決定的な強味を持つ。何故ならその特性故に山村農業は、それ自体一つの「農産物自給体」となり得るからである。この自給体は、自らのみならずそこと結合する他の社会に対しても、自給機能を発揮し得る。

消費地にとって見れば、不特定多数の大量集中生産地からの生産物を、一つずつ“つまみ食い”する方式から、特定の生産地とのつながりによって、自ら必要な食料の大部分を確保することになる。

「いわゆる産直」（産地直送販売方式）は、単に生産物の消費地での直接販売を指すに過ぎない場合が多い。“鳥取スイカ”とか“福井のカニ”とか単一種目で行なわれるのが多いのは、産直が単なる流通形式の相違を示すに過ぎない実体しか持ち得ていないからなのである。

ここで提案したい「本来の産直」は、自給原則を踏まえて生産される、多種目複合生産過程と消費過程（これは本質的に多種多様）との直接的結合を指す。これは、生産者が消費者の顔を知り、消費者が生産地の実情を知っているという関係である。

これは、不特定多数を対象にした市場生産方式とは明らかに異なった方式である。生産者の工夫は、直ちに消費者に伝えられ評価される。自給原則を踏まえた複合生産方式をとっているため、個別種目の部分肥大化がチェックされ、売れ残りとか暴落とかの経済変動の波をかぶらなくてすむ。

さらに生産過程と消費過程とが密接に結びついているため、生産物販売をめぐる価格関係も生産物全体を対象にした「総価格」契約として行なわれるため、全種目の生産安定化が可能になる。そしてこのことは、生産者、消費者相互の信頼性をも確立して行こう。

この仕組のもとでは、生産者、消費者共に自らの欲求を、どの様な形にするかに力を注ぐことになる。生産者は自らの生産への欲求をどの様な形にして社会に伝えるかを、又消費者は、消費への欲求をどの様な具体的生産物として生産者から受け取るかを、それぞれ真剣に模索することになる。そこでは、消費者の欲望誘導は意味を持たなくなり、生産物の実質が消費者に喜ばれ、その消費者が生産者を支えるという関係の形式こそが重要事となる。

食糧生産でこの様なシステムを形成するためには、先ず安全性・信頼性を生産物が保持しているかどうかにかかってくる。山村農業が自給・複合性を原則とする限り、消費者の潜在的欲求を自らの側に引きつけることは可能となる。又、その原則に立たない限り、生産者・消費者の「人間性的関係」は成立しないと言えよう。

山村農業の「自給・産直化」——もしも山村で“ふる里村”を提唱するなら、それを観光施策化するのではなく、農業の振興及び構造改革の強力な手段として、“市場経済を超えた”生産・消費システム形成の動きとして、構想すべきであると筆者は考える。目的は、山村への人の誘導ではなく、真に自立した生産圏として、都市消費者との人間的な生産物供給関係を結ぶことにある。

都市消費者は、消費の自律化を求めて多様な消費者運動を繰り広げている。そして従来の市場経済の枠を超えて、新しい製品需給機構形成への模索を続けている。その場合、原点に据えられているのは、製品のみならず生産者への信頼である。生産者との話し合いや生産者を訪ねる機会を設定しているのも、そのためなのである。

未来においては、山村こそがこの動きに実質的に対応できよう。何故なら山村には画一化不可能な農業があり、個性に満ちた土地が残されており、複合生産に適した自然条件があるからである。

従来、弱点と誤認されて来た山村農業を巡る諸条件をプラスに転化するには、山村農業の進む道すじを「自給・産直化」に向ける以外にはないと言えよう。

2. 林業の「事業部制化」

林業の現実を巡る問題点は世上種々論じられており、細かい点についてここで敢えて述べるまでもないので、記述を省略する。しかしそれらを総まとめにして、以後の論述のために林業の問題点を一点に要約しておこう。即ち林業の問題点は、育林から伐出、加工、利用それぞれの過程を一貫した「自律展開システム」が、山村において未形成であるということに求められる。

そのため、「地域」内において一貫したシステムを作ろうとしたり、全過程を統括し得る組織体を形成しようとする方策が、その解決策として講じられて来た。

しかし直直な「地域林業」形成や、「川上から川下への一体化」プランでは、現状の問題点を一時解決するかに見えて、その実根本的には何の問題解決をもなし得ない場合が多い。各地で、組織化とか機構整備に取り組んでいるにもかかわらず、その成果が生産物への需要確保という形であらわれていない。そうであるからこそ、山村での林業は一向に活性化しないのである。

前項においては、山村農業の方向を、生産者と消費者とが互いに信頼を交わし得る形式の創造とそれを支える生産の実質形成に設定した。この文脈は、当然林業においても当てはめられるものである。

従来見られた林業における「産地形成」は、需要の動向を的確に把握し、そこに集中的に働きかける生産者の販売戦略によって実現されたものである。しかもそこで供給される商品は、「良質商品」として他商品より優位に「差別化」される物であった。「良い物」であれば売り易く、「良い物」でありさえすれば売れたのである。

しかし将来はそうではない。生産者は、消費者に「欲求」を起こさせるに足る製品を開発し、供給しなければ、消費者の関心と呼べないであろう。「社会的ニーズ」などというものは、概して作られた上っ調子のムードに過ぎない。だからそこでは商品の外観とかブランドが幅を効かす。

しかし欲求ははるかに個別的で多様性に満ち、しかも実質的な様相をとって表わされる。消費者の求めるのは商品の持つ実質であり、自らの欲求に見合った商品を供給してくれる生産者の存在なのである。欲求の満足は、消費者による生産者への希望と信頼、生産者の消費者に対する安心と喜び、この2つの「信頼関係」の中において果たされる。食と共に人間らしい生活にとって必須条件である住環境の提供を行なう林業にとって、この「信頼関係」は、極めて重要なことなのである。

このような生産者と消費者との信頼関係は、大工業においても、あるいは形式的な林業システムの形成によっても実現し難い。それを可能にするのは、「林業の工芸化」を担う職人技術集団の活動なのである。

都市の木材加工業・商社等は、集成材その他によって「林業の工業化」を図って行こう。これは、「木材を工業材料化する」道である。そしてそれは、窮極的には木材の過消費につながり、森林資源を「消費型資源」化するであろう。

これに対して山村林業は、「林業の工芸化」、「木材の工芸材料化」をこそ目指すべきものである。それこそが、森林資源を「循環型資源」として永続的に保持して行く道である。そして、この過程を支える先端部分が、木材利用にかかわる職人技術集団なのである。

筆者の林業振興の構想は、この職人技術集団を一つの「林業事業部」として先端・自立化させて、消耗品文化溢れる都市の真只中に投入することを契機として繰り広げられる。

これ（「職人技術部」と呼ぼう）を始点として、その動きを支える「製材加工部」、その前に位置する「素材生産事業部」、そして後端部分としての「育林事業部」という様にそれぞれ自立させ、職人技術部の活動

の強烈な成果を、直接山にまで持ち帰る仕組みを作りたい、それが筆者の構想である。

ここで事業部間の関係について一言しておきたい。先端から後端までそれぞれの事業部の間には、一切の無前提な資材（製品）の流通は許されていない。すべてその段階段階で、生産・供給活動は「仕切点」を持たされている。実情に合わない生産・供給を行なう事業部は、いつでも他から切断されるシステムになっているわけである。それによってこそ各部分が自立し得るのであり、全体が自律システムたり得るものとなる。

林業が、自立・自律するシステムを内部形成しない限り、社会において独自の地位を築くことなど出来ない。1町村内で、森林組合を軸に形式的な“システム化”を図るのみでは、未来の山村林業の展望は開けない。

地域別の個性を尊重しつつ、山村横割りの事業部制の導入及び地域間の機能連関によって、現行森組主導林業の限界を打破したいと筆者は考える。

職人技術部の活動を先端として、山村林業は「21世紀に向けての木の文化」創造へのスタートを切るのである。その自覚と自尊に満ちた林業諸過程の自立化を、林業事業部制の確立によって図ること——そこに山村林業発展的を絞りたい。

3. 「コミュニティ」の確立

農、林、水産を問わず、山村は「循環型資源」の活用によるその根幹が据えられている。それは、農地、林地、さらに生産・生活手段としての道路等を、常に満度に活用出来る様を整えておくことを示す。個性に満ちた土地利用、生態系の維持保全は、農地、林地、道路等を万全の状態に保っておこうとする山村住民の努力の成果として表われる事実なのである。

このような努力は、しかし“上からの”行政命令で遂行されては意味がない。あくまで住民個々のそして住民組織の創意と自主に基づいてなされてこそ意味を持つ。

「個性的な生態域」を形成する山村の生活・生産環境——それは、住民個々の努力の接続の賜物として形成されている。住民は、自然へ働きかけ、生態系の保全を媒介として相互に結びつき、関係し合っている。それが「山村のコミュニティ」なのである。人間と自然との関係がしっかりと根づいていてこそ、人間と人間との関係も形成される。その様な諸関係が共同社会や共同組織を形作るのである。

これまで述べて来た表現に従えば、コミュニティとは、「個性的な土地利用の一定の拡がり」と言えようか。そう規定した時コミュニティは、同時に複合的土地生産体としての意味をも内包する。即ちコミュニティは、多種多様な土地利用・生産活動と多様多層な人間関係の総体を示すものとなる。

旧来の集落は、あるべき山村においては、この様な実質を持つコミュニティとして再編されて行かねばならない。そうでなければ自然との関係において、人間の生産活動が自律性を確立し得ないし、人間同志の共同関係も形成し得ないであろう。

外部の社会との接触を行なうのは、山村においてはこの様に形成されたコミュニティである。それは、複合的土地生産体として「自給・産直化農業」や「職人技術集団に先導される工芸林業」を担うのである。

このコミュニティを維持する規範は、法律や制度ではない。個性的な土地利用によって形成される生産・生活環境（生態域）の維持を基盤とする合意である。従って町村や県という行政機構の存立基盤との関係では、コミュニティの存在は重層性をとってあらわれざるを得ない。

そこで問題は、未来の山村においては、コミュニティの独自性・個性を前提として、町村等の行政機能が発揮されるべきことである。そうであるなら行政システムは、自ずと多様・多層なものとならざるを得なくなる。コミュニティの実態に即して、山村行政そのものが機能変化をとげなければならない。

例えばこの時には、一律の転作奨励などは存在し得ない。それは、コミュニティの個性的な土地利用形成の一環として位置づけられる。否、現実的に“奨励”すべき転作の必要がない程に、土地利用の個別化、集約化、多様化が行なわれているのであるから、“転作奨励”はコミュニティ活動の一層の助長のためになされるものとなる。その時この種の行政施策は、先験的な前提及び目的を持たなくなる。

これは、その他の“補助金行政”にも当てはまる。かくして山村への補助金は、実質的には「自由補助金制度」へと転換をとげる。コミュニティは、その受け入れと利用を自主的に決定する主体となる。

コミュニティがこの様な実質を具えた時、町村等山村行政は“小さな行政”となり、しかし反面コミュニティを基盤とする政策の受容・実行は、多様・多層性を深めて行くのである。ここでは、もはや画一的な山村の姿はない。

以上の様な意味をこめて、筆者は「自由補助金制度」を受容し得るだけの実質を具えたコミュニティの創造とその統合体である山村づくりを、山村の基本方向の一つとして設定したい。

4. 「山村合理」の企業誘致

山村の清澄な空気を求めて、先端企業が進出を始めている。現代の精密企業にとっては、ホコリが大敵なのである。又、交通手段の発達が山村との時間距離を縮め、立地性を高めた。この様な傾向は、将来にわたっても続こう。これはこれで山村の人口を増やし、新卒者に就労の場を提供するので、多くの山村で歓迎されている。

しかし問題は、山村にどんな企業を誘致するかにあるのではなく、企業が山村でどのように振舞うかに求められるべきであろう。

岐阜県郡上郡美並（みなみ）村。岐阜市から40kmを隔てる山村である。ここに、先端産業に位するDメタル工業の岐阜工場がある。D工業は軸受メーカーであり、きわめて高度な技術を有している。

この工場の開設は古く、戦後直後より操業している。これは、創業者が戦時疎開で美並村に世話になり、その恩返しにと自らも本籍を出身地（福岡）より移し、この工場の発展に力を尽して来た、という事情による。

現在この工場は、D工業全体（9工場、本社名古屋）の30～35%の製品を作っている。しかも新製品実験ラインまでも自工場で作り、外へ出している程である。

このため高度な技術情報はこの工場に集積されており、都市からそれを吸収に人が集って来る。

この工場の特徴は、しかしこれだけではない。主力先端商品開発、実験ライン開発を行なう頭脳集団が、美並村出身者を核に（従業員中74%を占める）、郡上郡内出身者によって形成されていることこそが、もっと重要なこととして指摘されなければならない。

岐阜工場のこの様な特徴に対応して、D工業全社員中郡上郡出身者が50%弱を占めるに至っている。まさに“地場産業”と言ってよい実質を、D工業が持っているとしてよからう。

D工業の美並村への進出は、創業者の人間性の発露によるものではあったが、その後の岐阜工場の発展は、山村に立地する企業の理想的な歩みを示している。それは、地元の優秀な人材の掌握とその能力の高度発揮を、工場発展の駆動軸に据えつけたことである。

地場に定住した技術者だから、責任ある、意欲に溢れた仕事をする——これは、この工場の幹部の表現である。まさに自立、自尊の技術者育成が達成されていることが、その言葉のうちに語られている。

山村に進出する大多数の企業が、中枢主力部分を都市から移入させ、山村の人々は単に安価な労働力として、非基幹労働に従事させるに過ぎない事例と比べて、D工業は、何と優れた方式で工場運営と地域の振興に臨んで来たか。

D工業は、見方を変えて言えば、地元の有能な人材の吸引と教育、そして先端技術者への育成を徹底して追求して来たからこそ、全社中の先端部分を担う工場になり得たと言えるのではないか。

地元在住の技術者。ふる里への愛情と誇りに支えられた技術者。彼等は、自らの愛するふる里の大地と同等に、自らの活動する企業の発展を望んだに違いない。ふる里の工場に、自立・自尊・信頼・創造の技術を根づかせようとしたのに違いない。

地元出身の技術者達と彼等を核にして工場経営を考え続ける経営者達と、両者が一体となって“先端”と言われる技術水準をきり開いて来たからこそ、持続して地元の優秀な人材を吸収し続けることができたのであろう。技術の創造的開発を地元出身技術者が行ない、その成果が工場を進展させ、その結果地元での新規雇傭の継続が可能となる——まさに「自給型」の企業経営と呼んでいいのではないか。

山村は、企業を誘致するのみでなく、企業にどう振舞ってもらうかを選択しなければならない。その選択の基準は、D工業の様に徹底した「自給型」の企業経営が行なわれるか否かに求められねばならない。

山村が目指すべきは、“企業の誘致”のみでなく、誘致企業の地場産業化を図るために、D工業の例に見

るとき「自給型」技術開発・技術者再生産態勢の確立を、企業と連携しつつ推進しなければならない。又、それが出来る企業以外は、山村に有用ではない。これを「山村合理」の企業誘致と呼び、未来山村への企業立地の理念としたい。

将来は、情報メディアの高度な発達で、このような企業誘致の基盤となる技術教育面において、山村が決して不利な条件下におかれなことを保証してくれよう。職人技術と共に山村は、先端技術及びそれを開発する主体のバンク（BANK）たり得るのである。「自給型」の社会形成を行なうからこそ、山村においてそれが可能となるのである。この原則を、決して忘れてはならない。

謝 辞

本稿は、多くの人達との共同の上で成り立っている成果である。和歌山県農林部山村対策課の方々、日本経済新聞大阪本社編集委員の塩見譲氏、株式会社アシスト代表取締役宮川敬章氏、和歌山社会経済研究所研究部長加福共之、平田寿彦の両氏、同研究員府中健一氏、アトリエ・サワの澤良雄氏、日本長期信用銀行大阪支店調査役村田至氏の諸氏には、とりわけ深く御礼の言葉を申し述べねばならない。又、いつも足を運ばせて頂いている多くの山村の方々にも、御礼の言葉を述べておきたい。最後に、私の「想念」を本稿の様な形でまとめる大きなきっかけとなった、「農の再生・人の再生」（農文協刊）の著者である槌田紹氏に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。